雑事記（36）探訪二編

戦争遺跡探訪（10）

盛丘 由樹年

①雷電の部品（座間市役所）2020/7/22

7月22日、私は座間市役所へ行った。その数日前に新聞の地域欄を読んで、そのホールに雷電の部品が展示されていることを知り、早速見に行ったのだ。

その数カ月前にも、雷電の部品が一般家屋の庭先にあったことが発見されたというニュースがあったから、興味を持っていた。

その日も暑く、額に汗して歩いていると、座間市役所方面の上空には、大型輸送機が2、3機次々に間隔を置いて飛んでいるのが見えた。米軍・厚木基地に着陸するものと思われた。私は、それらが4発のプロペラ機だったから、B29爆撃機を連想してしまった。

座間市では戦争中、航空機の製造工場・高座海軍工廠（現在そこに自動車の工場がある）が、襲来する敵機を迎撃するための戦闘機として期待された「雷電」の機体を製造していた。ずんぐりした形が特徴の機体だった。当時は、上昇力に優れ、強い攻撃力をもった新鋭機だった。

その数十機の雷電は、海軍・厚木飛行場にも配備され、帝都防衛の任に付いた。B29迎撃のために何度か出撃した。だが、結果的には期待に応えられなかった。

敗戦によって戦闘機の機体はほとんどすべて破壊処分され、部品ひとつ残されていないものと思われていたが、近年、その存在が確かめられた。

歴史的に価値あるものとわかって、所有していた個人か寄贈したから、座間市が保管・展示をすることになった。

市役所ホールの中へ進むと、奥の一角に、ケースに入って展示されていた。雷電についての説明書きが添えられ、1／50サイズ程度のプラモデルもあった。わかりやすい。

これは、機体外側の、エンジンと操縦席の間に取り付けられるジュラルミン部品の一つであり、製作見本として高座海軍工廠に持ち込まれていたものと推定されている。実機から外したものではないので、実物と

はいいがたい面があるのだが……。終戦後、「余分なもの」として処分をまぬかれ、流失し、個人所有になっていたものと思われる。

座間市役所・ホール内に展示されている雷電部品（四角いケースの中にある）

通りかかった不審者と比較して大きさが推測できると思うが、近寄れば、かなり大きい部分であり、雷電の胴体がかなり太かったことがわかる。

②昭和歴史館（厚木市上荻野）2020/7/30

7月30日、私は厚木駅からバスに乗って上荻野へ行った。厚木市の郊外にあって戦争遺物が所狭（ところせま）しと展示されているというわさを聞いて、訪れた。新道橋のバス停からほど近いところに、「相州美術市場」という看板のある倉庫のような建屋がそれだった。

相州美術市場は、実は骨董店であり、主に美術工芸品を商っている。

その店主（社長）が戦後に入手した戦争遺物的なものを集めていたものを展示している。商品として安く（？）入手したものを売らずにいたものだ。

倉庫のような建屋の二階、屋根裏のような空間が、提示室になっている。見学者が来れば、照明と冷房を入れてくれる。食堂の店員のような人（学芸員？）が対応し、私に付き添ってくれた。（不審者を見張っていたのかもしれない）

確かに、戦争に関係した武器類、銃剣や手榴弾が展示されているし、勲功章もある。軍からの支給された装備品や衣服がある。古い写真や新聞記事、映画のポスターなども掲示されていて、雑然としている。

昭和歴史館の展示物の一例

個人的な所持品は、主に遺族から譲り受けたものだという。中には怨念のようなものが篭っており、宗教者にお払いをしてもらわなければならないようなものまであったという。そのためだろう、奥の方にかなり荘厳な仏像（阿弥陀三尊像など）のある祭壇がしつらえられていた。当初、なぜここに祭壇があるのだろうかと違和感を覚えたものだが……。

③平和祈念像（武蔵野市自然文化園）2020/8/30

この日、井の頭公園駅を降りて公園内をぶらぶらした。有料の自然文化園に北村西望の彫刻（塑像）展示館とアトリエがあり、長崎の平和公園にある平和祈念像と同じ大きさのレプリカがあるという。その像は１９５５年８月に完成した。

最近の新聞（読売新聞朝刊 2020/8/9）で、この像のモデルになった人物が明らかになったと報道されていた。吉田廣一さんだという。北村西望自身はモデル名を明かしていなかったから絶対ではないにせよ、接点もあったというから、かなり確かだろう。

彼は士官として軍務に服し、終戦のときビルマ方面にいた。内地に引き上げるとき、最終便の航空機の座席を、若い一人の妊婦（１・５人）に譲ったというエピソードをもつ、じつに人間的な人物だった。健全な心と体を持った彼は、翌年なんとか船で帰れた。

そんなことがきっかけで、私は平和祈念像を見ておきたいと思った。武蔵野市へ行くついでに寄れば、ちょうど都合もよかった。

いままで井の頭公園には何回か来たことがあったが、

有料エリアの文化園に入るのは気が進まなかった。子ども向けの遊び場だろうと、見下していた。

通常の大人料金にしても高くはなかったが、今回は高齢者割引で入れる。金を払ったからには、水族館や動物園を一通り見なくては……。

大きいゾウ舎には、ゾウの姿はなかった。飼育室内が記念館のようになっており、ここで一生を終えた孤独な、アジアゾウのはな子（1947−2016/5/26）の写真などの展示がされていた。はな子には飼育員泣かせの荒々しい一面もあったのだが、写真では限りなく愛らしい。ネット情報によると、凶暴な振る舞いをしたために、観客から石を投げられたり、鎖につながれ、やせ細ったりした時期もあったという。はな子にとっては狭すぎる環境だったようだ。

それから、自然文化園の奥の方にある彫刻の展示館に向かった。複数の展示館がある。展示の主役は、平和祈念像だ。戦争に関係したものなので、ここに取り上げよう。

「ん？　これは大きい！」

足元まで近寄れるから、フロアからは見上げてみることになる。こんな大きいものが室内に入るものだろうかと、疑う人がいるかもしれないが、個々の部品に分解組立ができるのだ。

巨大な平和祈念像
展示室の２階から見下ろす

井の頭自然文化園内の彫刻展示エリアは、これだけなく、迫力ある像たちが、室内にも野外にもたくさんあって、なかなか見ごたえがある。数倍の尺度の大きなものが多種多数あるから、大迫力だ。ここは大人向けの美術館だった。

展示館の隣に、まるで町工場のような、天井が高く、広いアトリエ（工房）も公開されていて、興味深かった。平和祈念像の原型もこのアトリエで作られたという。これらの像を造るのに、そうとう体力を必要としたことだろう。北村西望とは只者（ただもの）ではないことを思い知らされた。

④破損した墓石（武蔵野市源正寺）2020/8/30

さて、井の頭公園を後にして、三鷹駅前の道を通って、源正寺に向かった。駅からバスで行けるのだが、この際歩いた。

戦争中、中島飛行機・武蔵工場（武蔵野工場と呼ばれていた時期もあった）を狙っての激しい空襲があり、この墓地にその痕跡が残った。武蔵工場では航空機のエンジンを製造していたから、アメリカ軍が最重要目標として爆撃したものだろう。日本の軍部は八王子の山間部（浅川地区）などの地下に生産設備を移させ、製造を継続させようとしたほどだ。

周辺地域に、それによる被害が及んだ。武蔵野市源正寺の墓地にある墓石に破損の痕跡が残っている。

以前にこの雑事記で紹介した平塚市・乗連寺にある墓石と、同じような壊れ方だ。

破損した墓石
源正寺にて
空襲によるものだろう

その墓石を見てから、次に、この近くにある延命寺を訪れた。

⑤-爆弾の破片（武蔵野市延命寺 2020/8/30

中島飛行機・武蔵工場に投下された爆弾の破片とされるものが、延命寺の本堂の前に展示されている。簡易なアルミ枠のケースの中にあって、風雨に半ばさら

されている。上に乗せられた説明板には「２５０Ｋ爆弾の破片」とある。

延命寺本堂の前に展示される爆弾破片
中島飛行機武蔵工場を目標に投下された

一見、鉄くずだが、割れた部分をあたまの中で再構成すると、確かに爆弾の形になる。目算で長さを推定すると、５０ｃｍの大きさがある。破壊された工場の機械部品に見えなくもない。

爆発したとすれば、本体はもっと細かく砕けたと思えるところだから、これだけ形が残っているのは、コンクリート壁にぶつかったが、炸薬が不発にたったせいかもしれない、と私は思ったりする。

そして私は、武蔵野中央公園へ歩いた。同じ武蔵野市内だから、ほど近い。この公園も戦争中は中島飛行機・武蔵工場の一区域だった。公園の脇には、その変電所が近年まで残っていた。それが解体される前に、私は訪れ、写真に撮っていた。

旧・中島飛行機武蔵工場の変電所
2015/1/18 撮影
その後、これは解体され、今はない

この二階建てコンクリート造りの建屋は、隣の敷地に戦後に建てられた都営アパート群の集会所として、補修・改装されて利用されていた。私が２０１５年に訪れた時、その利用が終了し、廃墟的なものになっていた。

戦争中にこの変電所は空襲によって一部損傷を受けていた。そのときの公園管理人に話を聞くと、彼は、補修する前には弾痕が残っていたと証言していた。

一帯を管理する都は、武蔵野中央公園を拡張する方針を推し進め、その後まもなく解体した、と私は聞いていた。一部の人が反対の声を上げたが、都に押し切られたという。

今回、私はそれを確認するために行ってみた。その跡地は、ところどころに大きな石が植え込みの中に配置され、曲がりくねった通路がつけられた庭園に変わっていた。そんな興趣のない庭園をうろつくのは、私ぐらいのものだろう（皮肉をこめて）。

⑥敵性外国人収容所（南足柄市内山）2020/9/6

２０２０年９月６日、私は県立公園「２１世紀の森」の周辺駐車場に車を停め、山道を歩いて旧北足柄中学校を訪れた。途中、道は害獣除けの柵で遮断されていたから、車を駐車場に置いたのは正解だった。

旧・北足柄中学校
その名のプレートが古めかしい門柱に埋め込まれていた。（以前は別のプレートがあったのだろう）

ここは南足柄というよりも「山北町」に近い。ＪＲ御殿場線・山北駅から南西２ｋｍのところだ。その校舎

と体育館が、ほぼ閉校当時（２０１０年３月３１日）のままに、ひっそりと取り残されたように建っている。遠くから見れば、夏休み中の学校のようだ。周囲には住居もなく、交通の便もよくないから、ほとんど人が寄り付かないようなところだ。たまにイベント会場として使われることがあるらしいが、今年は感染症予防のためだろう、それもなかった。

閉校になったのは、この地域の住民の数が減り、過疎化したためだろう。

私は、ここに、太平洋戦争開始時に在日外国人たちを「敵国人」として収容した施設があったことを最近のニュースで知った。「敵国人抑留所」といって、戦時中、日本には３４カ所あったという。

その一つがここであり、元々戦前にはこの地に東京の外国人教師らが避暑のための別荘（保養所）を建てた。近隣住民は「異人館」と呼んでいたという。それを海軍が接収して研究所とし、開戦とともに敵国人抑留所に転用した。

戦後の１９４７年には中学校を開設するに伴い、校舎として使われた。それが建て替えられて、現在の寂れた校舎の姿になっているわけだ。収容所だった建屋は残っていない。

敵性外国人の収容に関しては、アメリカで日系人約１２万人が強制収用された件が知られているが、日本でも、その数を比べればごく少ないにしても、同様なことが行われたとはほとんど知られていないことだろう。

１９４１年１２月８日の開戦直後、連合国側の人びとの家に特高警察が踏み込み、主に成年男子を、有無を言わせず収容所へ送り込んだ。

この地の抑留所には、横浜方面で暮らしていた貿易商や宣教師の方たちが送られ、５３人の名前が記録された。

産経新聞今年９月３日の神奈川面の記事によると、針生ローダさん（７９）の父親がここに抑留された。ローダさん自身も、昭和１８年１２月に別の施設に送られた。

抑留された人の中には、日記を残した人もいて、その発見が以前ニュースになったことがある。

収容所での生活は、主として山林での労働であって囚人扱いだったと、かれらによって証言されている。

戦争中食糧事情が悪くなり、収容所の管理者が収容者に配給される分まで自分のものにしたことに気づき、そうとう怨んだことを日記に書き記した。「食べ物の

恨みは恐ろしい」などと茶化したりしてはいけない。

この地で亡くなった方は５人いたという。テレビの報道（どの番組だったか、定かでない）で、針生ローダさんが墓参りをするシーンがあった。私はその墓を探すことにした。形に残っているものとして意味があるだろう。近辺をしばらく歩いていると、ほとんどカンで見つけた。

戦争中この地に収容された「敵国人」
の墓と思われる墓石（一番左側）

⑦弾除け観音（綾瀬市報恩寺）2020/9/11

報恩寺は、古くから「おたすけ観音」として知られており、境内には多くの観音石像が置かれている。高さ３０センチほどの坐像が数多く並べられている。等身大の石像や立派なブロンズ像もある。

報恩寺の平和観音
この寺の多くの観音像の一つ

台座に「平和観音」と刻銘された石像もある。平和への思いを込めたものだろうが、これは戦後に造られたものかもしれない。当時は「平和」などというと、非国民扱いされたはず。

日中戦争が始まったころに、住職が『弾除け』のお札を発行したところ、多くの人が求めたという。それでこの寺は「弾除け観音」の寺として有名になった。

１９４１年にここからほど近いところに海軍・厚木飛行場（綾瀬市と大和市にまたがる）が作られてからは、その兵舎から航空兵たちの多くがこぞって参拝しにきたという。それだけご利益があったということかもしれない。海軍機は、敵の銃撃に対する防護対策が不十分だった（撃ち落されやすい）とされていたから、なおさら、切実な問題だったか。自分の体に弾が当たらなくても、機体に機銃弾が当たれば、死を意味した。

ご利益があろうとなかろうと、敵の弾に当たりたくないという不安が、あるいは、わらにもすがりたいという悲痛な思いが若者たちを『弾除け観音』の前で手を合わせる行為に走らせたというわけだろう。

いまでは、弾除け観音として参拝に来る人はいないにちがいない。弾除け観音と呼ばれていた記憶も、人々の心から忘れ去れようとしている。寺の方でも「おたすけ観音」を名乗っている。現に私は、墓参りに来ていた人たちに「弾除け観音」のことを聞いてみたが、みな知らないという。そんなことは住職に聞いてくれ、と言われてしまった。

住職の奥さんらしい人に話を聞くことができた。もちろん、彼女は弾除け観音のことを知っていた。どの観音像が弾除け観音かと聞くと、どれか一つということでなく、寺にあるすべての観音が「おたすけ観音」であり、「弾除け観音」でもあるとのことだ。しいて挙げれば、本堂の祭壇の左翼にある（向かって右側）観音像が「もっともご利益のあるもの」とのことで、ありがたくも、それを拝観させてもらった。写真を撮ってもよいという。

本堂内の「弾除け観音像」
（高さ５０ｃｍほど）

⑧ひび割れた墓石（新宿区四谷・愛染院）2020/9/15

私は、西麻布の長谷寺で大観音像を拝観してから、地下鉄を乗り継いで、四谷の愛染院を訪れた。ひっそ

りとした、人気（ひとけ）のない寺院だった。
都心に近い、緩やかな傾斜地にある愛染院のある一帯も、空襲で焼け野原になった例に漏れない。隣接する墓地にも焼夷弾が降り注いだ。紅蓮の炎に包まれ、高熱で損傷した墓石が多くあったという。『シリーズ戦争遺跡 第3巻 町が消えた』辻隆弘編・汐文社刊のジュニア向け本から得た情報だった。
無縁仏になると、墓石は撤去され、遺灰は一箇所に集合されるから、今ではそれが残っているのは少ないというが、私は行ってみた。今回も墓探しの旅となった。
その墓地内を探索すると、その本に掲げられた写真と同一のものは、見つからなかった。
その代わり、ほかに、ひび割れた墓石があったので、それを掲げる。説明書きがないので、戦災のよるものという確証がないのだが……。墓石の表面に浮き出たまだら模様も熱によるものだろうと推察した。

四谷・愛染院のひび割れた墓石
ひびを補修した跡がある。

石人像探訪

概説

時たま街を歩いていると、建物の入り口に門番のように立っている石人像に出会うことがある。たいてい左右二体で、一対になっている。その両者の違いは認められず、ほとんど同じ形ものだ。標準的には高さ１～１．５メートルほどだから、等身大よりやや小さめだ。重さは１００キロ以上、大きなもので５００キロありそうだ。

これを最初に見た印象は、だれでも奇妙に感じるものだろう。何のために置かれているのか、よくわからない。なぞの物体なのだ。地蔵や庚申塔のように信仰の関係するものでもなさそうだし、偉人や権力者の肖像でもない。

そんな石像は昔からあって、風化して摩滅することがあるけれど、故意に破壊されない限り、長い年月、形を保っているのだろう。千年以上のものもあるほどだ。奈良県明日香村にある石造物・猿石など、何のために作られ、何を意味しているのか、よくわかっていないものの典型だろう。

石人像といえば、世界各地にそれぞれユニークなものが造られている。イースター島のモアイ像は有名だ。

日本にある石人像、特に文人石は、朝鮮（韓国）由来のものとされている。朝鮮石人像とも呼ばれている。

朝鮮半島から不当に持ち出されたものとするならば、数年前にいくつかの仏像で事件が起きた（九州方面の寺に忍び入った何者かが韓国に持ち去った）ように、彼らから「とくかく返せ！」という声が上がるのかもしれない。政治的に日韓関係がこじれているので、なおさら……。

韓国・済州島の石像トルハルバンは、観光する人にはよく知られているという。モアイ像とトルハルバンには、造形的に共通点が多いことが興味深い。

キルギスタンに、似たような石人像があるとの情報もあり、文化的ルーツとしては遊牧民族の多い中央アジアにあるのかもしれない、と私はにらんでいる。彼らはヒツジの石像も作ったりする。それは神の使いとしての動物の一種だろうけど。

よくわかっていない私は、文人石もトルハルバンも「似た者同士」であり、同類と理解している。

文人石は、家の門のところに一対で置かれていることが多い。門番として置かれているのかもしれないが、

穏やかな顔をしており、武装もしていないから、不思議だ。寺の仁王（金剛力士）あるいは神社の狛犬のように、訪問客を睨み付けたり威嚇したりはしない。つまり、客を出迎えるための案内人（英語で usher）としての役を担っているのだろうか。客をこころよく歓迎するためのものかもしれない。

門の前に置かれる文人石では、左右の像の置き方が二通りあり、ともに前を向いているものと、対抗しているものとがある。どちらでもよいのかもしれない。

庭の点景の一つとして置かれるようにもなっているが、そもそも、このような石像は墓を守るため、あるいは埋葬者に付き添うものだったという説がある。

日本の古代に造られた古墳の埴輪がそうだし、6世紀、大和朝廷に歯向かった九州の磐井（いわい）の古墳とされる岩戸山古墳に石人が置かれていたことがよく知られている。

私がこれまでに見かけ、写真に撮って画像を残しているものについて、以下に、古い年月順に紹介したい。多くは文人石と言われるものだ。

このほかにも、新宿区・早稲田大学の大隈庭園に通じる門の近くに、童子石と文人石がそれぞれ一対ずつ置かれているという情報があるが。今回は探訪するのをスキップした。

各項には、おおまかな名称（場所）年月日を示す。項目として九つある。

①仮置きの石像（横浜市青葉区新石川）2008/9/13

２００８年ある秋の日、私は東名高速道路の江田のバス停で降りてから、國學院大学方面に向かって道を歩いていた。途中、更地になっている地面の一角に、石人像が二体置かれているのに気づいた。四角い帽子に、両手を胸に合わせ、箱のようなものを持っている形だから、典型的な文人石だった。

この由来は不明だ。おそらくこれは近くの住宅地で、不要になったとして撤去され、ここに仮置きされたものだろう。やや黒ずみがあり、新品には見えないし、置き方がやや乱雑だから。だいたいこの辺は、新興住宅地になっており、古い家は肩身が狭そうだ。

次の日も同じ用事があったから、カメラを持って行き、写真に撮った。次の年も同じ道を歩く機会があったが、もはや文人石はなかった。

仮置きされ、横たわる二体の石像
横浜市青葉区の空き地の片隅に置かれていた。

②高橋是清翁記念公園（港区赤坂）2010/11/8

私は地下鉄駅・青山一丁目から歩いて草月会館に向かって歩いていると、日本庭園的な公園があったので、イベント開始までの時間つぶしのために中を見て歩いた。ここが高橋是清の屋敷があった場所だとは、看板を見て知った。

高橋是清翁記念公園の石像 その１
目が釣り上がり、やや微笑んでいる

江戸・明治・大正・昭和に生きた敏腕政治家・高橋是清（これきよ）が住んでいた屋敷（二・二六事件のときここで殺害された）の庭園の一部が公園として一般に開放されている。

高橋是清翁記念公園の石像 その２

歴史的因縁よりもこの公園の中に石灯籠や石人像が多いことに驚いた。何体あるのか、数えなかったが、これだけまとまって多くの石人像が見られるのは、珍しい。高橋是清が自分の趣味で集めたものと推察される。石人像を「庭石」の一種として眺めていたのだろう。それらをどこから集めたかは、問わないでおこう。

それらの写真を何枚か撮ったが、ここでは二つにしておこう。

③玉川大師（世田谷区玉川）2013/8/4

玉川大師には、あちこちから寄せ集めたような、雑多な仏像が野外と堂内に数多くある。それほど広くない境内だから、ざっと見て回れる。そして本堂の地下には、「なぞの地下空間」がしつらえられている。こういう暗いところに入っていくのは興味深いことだから、私は物好きながら、二回もここを訪れた。二子玉川駅より歩いて行ける。

多くの像の中に、文人石もあった。ここでは文人石を仏像扱いしているわけだ。本堂前の張り出たバルコニーの左右の角に、対抗する向きでそれらが置かれていた。

玉川大師の石像

④東京国立博物館（台東区上野）2014/4/27

東博の東洋館前の植込みに、計４体の文人石が立っている。それぞれ大きくて立派なものだ。石人像の代表的なものだろう。それにしても、ここに置かれている意味がわからない。

東京国立博物館の庭にある石像

⑤吉川英治記念館（青梅市）2015/5/3

奥多摩青梅線の道沿いに吉川英治記念館がある。青梅駅から５ｋｍのところだ。吉川英治記念館の主屋は旧家の様式を保った文化財的な価値のある邸宅だ。日本的家屋だが、執筆のための西洋風書斎を増築した。庭園も立派なものだ。吉川英治の著作に興味がない人でも、一度は訪れて家屋敷を見物したい。

吉川英治記念館の庭にある
石像のひとつ

この記念館の庭の中に、いくつか、小さめの石人が立っている。複数対の文人石だ。

この邸宅は、依然住んでいた人から吉川英治が買い取ったものか、あるいは譲り受けたものらしいから、石人などはもともとここにあった可能性があるが、吉川英治が後から持ち込んだものかはわからない。

おまけに、埴輪もあった。人型の埴輪は、石人と似たイメージがあるのでここに掲げよう。レプリカにしても、よくできている。

吉川英治記念館の埴輪

なお、吉川英治記念館は、運営難が伝えられ、ここ一年あまり閉館していたが、この９月、青梅市吉川英

治記念館として再開したというから、喜ばしい。

⑥鎌倉の道路わき（鎌倉市由比ガ浜）2010/11/8

鎌倉の御成り通りから、長谷寺方面に歩いていると、道路わきに一対の文人像があった。店の入り口の前に、立っている。割と大きめのもので、よくできている。目鼻立ちがはっきりしており、顔つきがややいかめしい。通り過ぎる人たちに、にらみを利かせている。

鎌倉の道端にある石像
一対が前を向いている

⑦根津美術館庭園（港区赤坂）2015/8/23

根津美術館は、都内の一等地にある格式の高い美術館の一つだ。美術館の建屋に関しては、懲りすぎの感があるが（有名な建築家によるものだが、入り口がどこにあるのか、惑わせられた）、意外に広い庭園がすばらしい。そこに何体かの石人像があるのが興味を引く。庭園に石人像を置くのは、高級な趣味ということだろう。

典型的な文人石だけでなく、やや変わったものまであるから、見て回るのがたのしい。

根津美術館庭園にある石造 その１
武人像か？
ヘルメットのような帽子を被る

根津美術館庭園の石像その３
ややかがんだ姿勢の文人石

根津美術館庭園に石造 その２
これは童子石？

もう一つ付け加えたい。２０２０年９月１４日に、たまたま別の目的で、根津美術館周辺を歩いていると、裏門の辺りに大きな文人石を見つけた。このとき休館中だったから、門は硬く閉じられていたが、その門前脇の植え込みに大きな文人石が、二体対向して置かれていた。これは高さ２メートルありそうだ。重さにして１トンあろうか。

根津美術館・裏門前にある石像
対抗する二体のうちの一つ

⑧長屋門の前に立つ石像（平塚市琵琶地区）2020/4/25

この長屋門については、前回の雑事記・長屋門の探訪で紹介した。今回は、門前の石像に注目したい。かなり立派な一対の文人石が高い台座の上にある。

長屋門の前に立つ石像

⑨山北町の石像（足柄上郡山北町）2020/9/6

山北町の路傍に奇妙な石像がある。初めてこれを見かけたのは、私が２０代のころだったから、もう五十年近くたっている。

山北付近の国道２４６道端にある石像、

修理部品を扱う(?)店先に一体だけ置かれている。二体並べる必要はないのかもしれない。この像の場合

は単独の設置でいいのかもしれない。
国道２４６を車で走るとき、通り過ぎる瞬間に横目でちらりと見るだけだったか、この日、車を近くの空地に停め、この写真を撮った。
シンプルな形で、丸い帽子をかぶり、目鼻が大きい。座っているかのような姿勢だ。これはトルハルバンというべきものだろう。全体がやや黒ずんでいるのは、長年道路わきにあるためだろうか。
〈うーん、済州（チェジュ）島に行って、本場のトルハルバンを見たいところだが……遠いなぁ〉